

【論文】

# 日高川流域の民家の平面構成の特性と変遷

## Characteristic Features and Transformation of the Floor Plan of Folk Houses around the Hidaka River

千森 督子

日高川流域の民家の平面構成は、平入の通り土間形式で、床上部分は全国的にみても珍しい二間取りを祖型とする。土間の前面軒下には風呂場や小便所が張り出す特性がある。土間は出入口、通路以外に、前面は農作業場として、奥は炊事場としての機能があった。18世紀後期には三間取り、19世紀中期には四間取りが確認され、漸次機能分化して部屋数は増加する。

近代以降は近世の平面構成を踏襲しながら変遷する。大正時代には土間周辺にも変容がみられ、炊事場が別棟となり拡大し、床上部分は四間取りが主体となる。土間での農作業は次第に納屋に移行する。高度経済成長期以降は台所改善も進み、昭和50年代以降は土間の床上化が顕著になり、伝統的な平面構成が土間から解体していく。

キーワード：民家、日高川流域、平面構成、二間取り、土間、床上化

### 1 はじめに

和歌山県の民家に関する先駆的な報告書である、『和歌山県の民家』には、「民家はこれらの河川流域にそって存在し、そのタイプは流域ごとにひとつづつ(原文のまま)のグループを作っているようにみえる。」(和歌山県教育委員会 1964p.2)との注目すべき記述がある。本報告書は県下を地域別に考察し、特色を捉えた貴重な研究業績である。しかし、調査が短期間のために全県下には及ばず、また、近世を主体とし、近現代でも民家が大きく変容する昭和以降にはあまり言及されていない。そのために、筆者は和歌山県の民家の特性と変遷を河川流域毎に明らかにするために、1978年に紀の川流域から研究を始め、貴志川、有田川、日置川、古座川、那智川、熊野川、北山川流域の民家研究を漸次続けてきた<sup>1)</sup>。しかし、紀中の日高川流域に関しては単体としての民家研究に留まり(千森 2014)、流域としてのまとまりを掌握するに至っていない。

そこで、本稿では日高川流域の民家の特性と変遷を捉えることを試みる<sup>2)</sup>。日高川は龍神岳に源を発し、上流域は北に白馬山脈、東に紀伊山地、南は果無山脈と1,000m級の山々に囲まれているために河川の勾配が大きく、急峻な

地形を縫うように蛇行しながら流下する。下流域では日高川町和佐で江川と合流し、御坊市内を流れた後に河口で西川を包含し紀州灘に注ぐ。そのために、下流域には沖積平野が形成されているが、中流域から上流域では河岸段丘や緩傾斜地に屋敷を設けてきた。住民の多くは農林業に従事し、河川を活用した筏師としても生計を立ててきた。

民家には種々の地域特性があるが、本稿では、生活に直結する平面構成の特性と変遷を解明することを目的とする。

### 2 研究方法

研究方法としては、文献考察に家屋調査、聞き取り調査結果を加味して検討する手法をとる。

文献考察に関しては、『和歌山県の民家』に流域沿いの市町村の郷土誌(史)を交えて行う。

家屋調査は、観察調査、写真撮影、実測調査に加えて、所有者の聞き取り調査を行った。収集した資料に、家相図や文献資料を含めて考察する。地域についての聞き取り調査は、見識の深い学識経験者から行った。家屋調査と聞き取り調査は、2004年7月、2005年6月、2012年9月、2019年12月、2020年1月に実施した<sup>3)</sup>。

### 3 結果および考察

#### 3.1 近世の平面構成

まず、祖型としての近世の平面構成を把握する。

基本とする平面構成は、平入形式で、通り土間の片側に居室が配される形態である。土間の多くは、右勝手の形式である。土間は大黒柱列で機能的には前後に分化し、前面が出入口、通路以外に農作業場として、後方が炊事場としての機能をもつ。床上部分の部屋数や配置に違いがみられるので、部屋数別に事例を取り上げ考察する。

##### 3.1.1 二間取り事例

『和歌山県の民家』では、通り土間の片側の床上部分が全国的にみても珍しいとする、二間取りの平面構成が2例掲載されている(和歌山県教育委員会 1964 pp.106-110)。

1例は日高川中流域の日高川町三佐にあった旧小早川家住宅<sup>4)</sup>である(図1)。



図1 旧小早川家住宅外観

近世でも18世紀後期の建築とされている、小規模農家である。復原された建築当初の平面構成は、平入形式で、間口1間半の土間前面に風呂場が軒下を利用して突き出す(図2)。

土間は奥行き2間半の通り土間形式で、中戸はない(図3)。

床上部分は前後2室(オモテとナンド)から成り、居室間は建具で仕切られている。家族の日常生活空間である裏側室は1室であるために食事の場であり寝室である。食寝分離がなされていない初期的な平面構成であり、土間境には建具が無いため、寝室として必要な閉鎖性は確保されていない(図4)。

その後、裏側室が梁行き方向に4尺程背面側が拡張され、4畳から6畳に拡大するが、部屋数は2室のままで平面構成は変化がない。

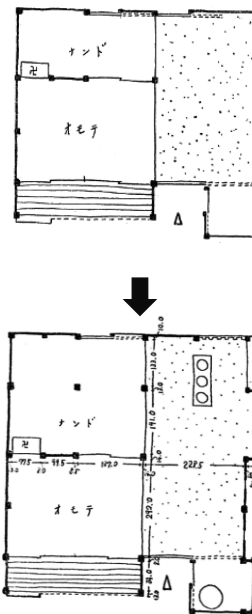


図2 旧小早川家住宅平面変遷図(『和歌山県の民家』より転掲)



図3 旧小早川家住宅土間



図4 旧小早川家住宅居室

『和歌山県の民家』に掲載されている、もうひとつの二間取りの事例は、近接した日高川町老星の原見家住宅である。

基本的な平面構成は、前掲の旧小早川家住宅と変わりが無いが、表側室が10畳、裏側室が7畳と規模が大きく、さらに土間境の裏側室が3尺桁行き方向に土間に張り出している点が異なる。

平面構成はその後、居室間が梁行方向にも建具により分割され、二間取りから土間境食違い四間取りに発展する過程を辿る。後列室は食寝が分化し、ダイドコロとナンドに分かれる(図5)。

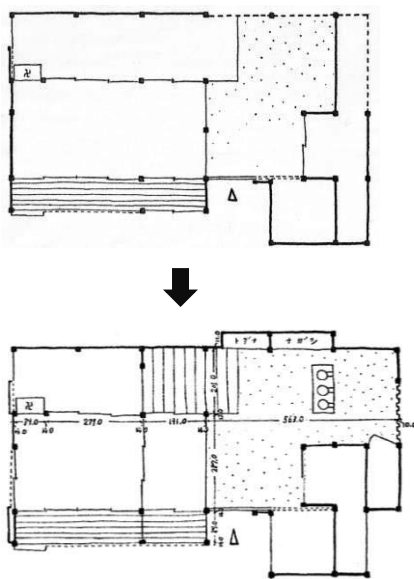


図5 原見家住宅平面変遷図(『和歌山県の民家』より転掲)

他に二間取りの民家が掲載されている文献としては、『日高町誌』下巻がある。日高町は日高川の下流北部に位置するが、江戸時代から明治中期の住まいの代表的な間取りとして、通り土間で床上が6畳2室の二間取りの平面構成の模式図が掲載されている(日高町誌編集委員会 1977 p.579)(図6)。

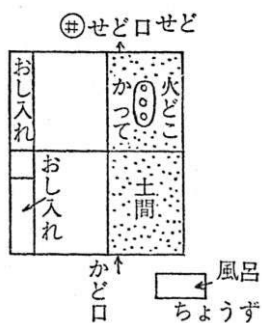


図6 二間取り平面模式図(『日高町誌』より転掲)

これらの事例から、日高川中流域から下流域で二間取りが分布し、かつ二間取りから四間取りに発展していったことが掌握される。なお、『和歌山県の民家』には、「この二間取平面がもつとも初期的段階を示す平面と断定して差し支えない。」(和歌山県教育委員会 1969 p.7)としていることから、二間取りが祖型として位置付けられる。

### 3.1.2 三間取り事例

二間取りの次の発展段階と考えられる、三間取りの事例として、『和歌山県の民家』では、日高川の上流に位置する美山地区の川原河の西川家住宅、額田家住宅の2例があげられている(和歌山県教育委員会 1969 p.34)。

西川家住宅は、18世紀後期の建築で、「殿屋敷」と地域で呼ばれた元庄屋宅、元筏師宅であり、家屋規模も大きい(和歌山県教育委員会 1969 pp.110-112)。

復原平面図は、間口1間半の通り土間の前面軒下に1坪弱の風呂場と思われる部分が突き出す。床上部分は、当地方で「十振り」(ジューブリ)<sup>5)</sup>と呼ばれる、10畳の居室が前列に1室、後列は4畳と6畳の2室が配される三間取り形式である(図7)。

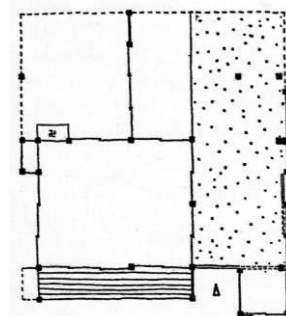


図7 西川家住宅復原平面図(『和歌山県の民家』より転掲)

その他の文献では近世の民家で三間取りの事例は確認されなかった。下流域の旧川辺町の郷土史である『川辺町史』第二巻通史編下には年代は特定されていないが、「六振」(ロクブリ)<sup>6)</sup>として表が6畳1室で裏側のダイドコロとナンドが各3畳で配される小規模の三間取りの記述がある(川辺町史編さん委員会 1997 pp. 873-874)。

三間取りはその後、オモテが二分されて四間取りに発展していくと考えられているが、その事例は把握できなかった。

### 3.1.3 四間取り事例

前列の座敷が次の間と奥の間に分化し、前列・後列が各2室の4室構成となった四間取りの平面構成の事例がある。

『和歌山県の民家』では、天保 12 (1841) 年頃の普請とされる中流域の日高川町佐井の柏木家住宅は、四間取りであるとしている(和歌山県教育委員会 1969 p.34)。

掲載図は現状平面図であるが、形式は原型を保持し、通り土間形式で土間前面に風呂場を突き出している。床上部分は、土間境は揃っているが、部屋境は梁行き方向に食違う四間取りである。なお、前列上手に小間が付帯する(図8)。

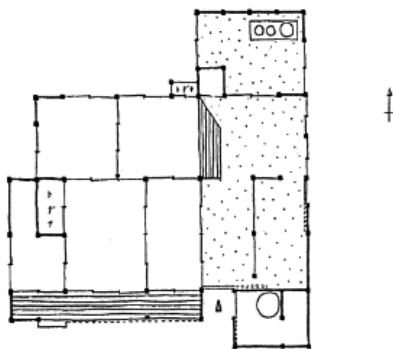


図8 柏木家住宅現状平面図(『和歌山県の民家』より転掲)

一方、海岸沿いの三尾湾に面した美浜町三尾の水藪家住宅は、天保年間(1831-1845)の建築とされるが、同じく通り土間の四間取り形式である。

『美浜町史』によると、掲載図は現状図であるが、「当住宅は小規模であるが軸部の変更は少なく」(美浜町史編集委

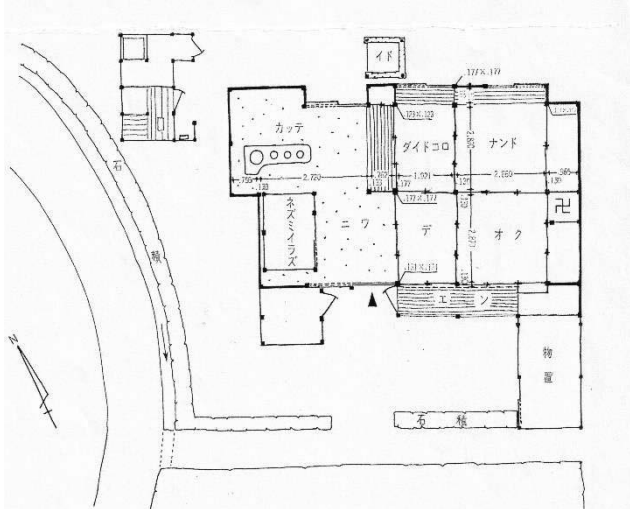


図9 水藪家住宅現状平面図(『美浜町史』より転掲)

員会 1984 p.106)と記していることから、基本の平面構成は変容がないと考えられる。床上部分は部屋境の間仕切りは柱筋が通っているが、後列下手室に板間が土間境に取り付くために、土間境食違い四間取り形式である(図9)。

なお、土間中のネズミイラズは後補であり、土間口と東南部の物置は新しい建物である。別棟の風呂・便所は古材の転用材であるが増改築の経緯ははっきりしないとしている。

『和歌山県の民家』では、図面の掲載はないが近世に四間取りであった事例が数例取りあげられている(和歌山県教育委員会 1969 p.35)。

日高川上流域の旧美山村寒川西ノ川の堺茂吉家住宅は祈禱札で文久三(1863)年の建築とされる。その平面構成はダイドコロから土間に板間が張り出した土間境食違い四間取りである。寒川朔日の寒川芳朗家住宅は、棟札により万延元(1860)年建築とされるが整形四間取りであると指摘されている。また、寒川土居の土豪、寒川道典家住宅<sup>7)</sup>は同年代であるが部屋境四間取りである。

これらの事例から近世でも 19 世紀中頃には四間取りが成立し、部屋境食違い四間取り、土間境食違い四間取り、整形四間取りが存在したといえる。近世で四間取りの平面構成をもつ民家は庄屋、土豪などの役職宅や地主層が主である。

### 3.1.4 近世の平面構成の要約

近世の平面構成は、通り土間形式で、土間の前面軒下には風呂場が張り出している。土間は出入口、通路としてだけでなく、前面は農作業場として、後方は炊事場としての機能があった。

床上部分は、18 世紀後期には二間取り、三間取りが、19 世紀中頃には四間取りの平面構成が確認される。そのために、漸次機能が分化して部屋数は増加するが、近世後期ではこれらの平面構成が混在していたといえる。

## 3.2 近現代の平面構成の変遷

つぎに、近現代の平面構成の変遷に関して考察する。

住居の移り変わりを『日高町誌』下巻は3つの時代に区分して記述しているが(日高町誌編集委員会 1977 pp. 578-586)、近代以降を明治時代、大正時代、昭和時代と明快に区分してその変遷を記述した市町村誌(史)はみられない。そこで、近

現代を明治時代から昭和初期までと、生活が高度経済成長により大きく転換したと考えられる、昭和中期以降に二分して捉える。

### 3.2.1 明治時代から昭和初期までの変遷

明治時代から昭和初期の変遷を捉えるために、まず、大正時代までの変容を考察する<sup>8)</sup>。

平面構成は近世同様に通り土間が継承されていたが、大正時代になると土間周辺が変容していく。

日高川下流域の旧川辺町の南東部を占める山野地区の郷土誌、『山野区誌』は同地の民家の平面構成について言及している。土間は、右勝手の通り土間で、土間幅は広く、小規模の家でも一間半から二間あるとしている。しかし、「大きな家でも入口の右横に壺をいけ、…小便受を設けてあった。大正の中期ごろから暮し向がよくなるにつれ、余力は家屋の改造に向けられてこれらはいづれ(原文のまま)も姿を消した。」(山野区誌編纂委員 1968 p.475)と記されているように小便所を風呂場と共に別棟や納屋内で設けるようになり、土間周辺が変容したことがわかる。しかしながら、大正初年頃までは風呂場を設けない家が相当あり、「もらい風呂」の風習があったことが同書に記述されている(山野区誌編纂委員会 1968 p.479)。

納屋ができる土間での農作業が減少し、保管されていた農林業用の小道具も移されていく。土間は作業空間から穀物などの収納空間として活用されるようになり、大正時代には土間隅には奥行き半間の穀物等を収納するネズミイラズ、イラズと呼ばれた戸棚が設置されるようになる。

奥土間の炊事場は、『山野区誌』では、「炊事場の別棟になったのは、おおかたの家で大正時代からである。」(山野区誌編纂委員会 1968 p.477)と記されている。

さらに、日高川町江川に居住する元教師の原義則氏(昭和30年生まれ)から、大正初期に建築した主屋の炊事場は背面に別棟で設ける形式であったことが聞き取れた。

これらから、炊事場は、主屋内の奥土間から別棟で設ける形式へと移行する傾向が把握される。

つぎに、床上部分に関して考察する。日高川町川辺地区の間取りに関して、『川辺町史』第二巻通史編下に、「当町の明治・大正期の家の大きさは、地域によって多少異なるが、一般に片十が多く、ついで七半や六振で、十振以上は少なかった。」(川辺町史編さん委員会 1997 p.874)と記述されている。

このことから四間取りを中心としながらも、三間取りがまだ存在していたことがわかる。

『山野区誌』でも、小規模家屋として六振りの三間取りの存在にふれている。床上部分の小規模なものは、座敷が六畳、後列の台所と納戸が各三畳の三間取りで、他に、座敷八畳、台所三畳、納戸四畳半の三間取りが二、三あるとしている。四間取りでは、七五振り(玄関三畳、奥四畳半、台所三畳、納戸四畳半)があり、一番多いのが片十(玄関四畳、奥六畳、台所三畳、納戸四畳半)と十振り(玄関四畳、奥六畳、台所四畳、納戸六畳)である。これ以上大きな六、四(六畳四室)、六、八(六畳と八畳の振り分け)は少数であるとしている(山野区誌編纂委員会 1968)。

下流域に位置する御坊市では、『御坊市史』に、「大正期は七半、片十が多く、部屋の間取りは四間取りが普通で、オモテ(デ、レ)、ダイドコ、ナンド、オクからなっていた。」(御坊市史編さん委員 1981 p.1067)と記述されていることから、四間取りが一般化していたことがわかる。

一方、大正12年に出版された『日高郡誌』下巻は当時の対象地域全体を包括した郷土誌であり、明治末期から大正時代の様子を知ることのできる貴重な文献である。年代は明確に記述されていないが、同書には、「中産の家にては十ぶり(四室、二十畳敷)を普通とし、六畳四室及び其以上の家は何處にも少かりき。」(日高郡役所 1923 p.1334)との記述があり、床上部分の平面構成は十振りの四間取りが一般的としている。

この文面を解釈しながら昭和52年に記述されたのが、『日高町誌』下巻である。自作の田畑を五段歩程度耕作し、二、三段歩の小作をしている程度を中産の家とし、「この程度の中産の家では、十ぶりの住居に、牛小屋がついている程度であったと考えられる。中産以下は主として小作農で、住居も十ぶ

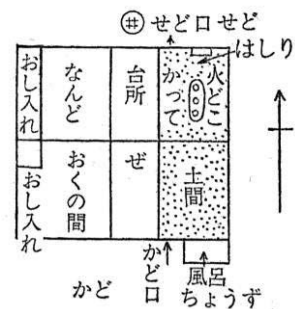


図10 四間取り平面模式図 (『日高町誌』より転掲)

り又はそれ以下で、むしろなどを敷物にしていた家が多かった。…中産以上は、数少ない地主が多く、六畳四室程度の住居を構え、穀物倉をもっていた。」と記述されている。四畳と六畳の二室が前列と後列に並ぶ十振りの四間取りが一般的であったとして、模式図を掲載している(日高町誌編集委員会 1977 pp.578-579) (図 10)。

そのために三間取りもみられるが、流域沿いの大半の市町村誌(史)では、地域を代表する間取りとしていずれも通り土間形式で床上部分が四間取りの平面構成をあげている。前列土間側室はオモテあるいはデと呼ばれ、上手座敷はオク、オクノマである。後列室は、ダイドコロ、ナンド(夫婦寝室)である。規模の大小はあるが、四間取りに移行していたと考えられる。

『日高町誌』に掲載されている明治末期から昭和時代の民家の平面兼配置図(図 11)には、土間前には風呂場が、奥土間には竈が残されているが、前土間には収納棚(おし入れ)が置かれ、納屋には便所が設けられた新旧の要素が混在した姿が描かれている(日高町誌編集委員会 1977 p.582)。

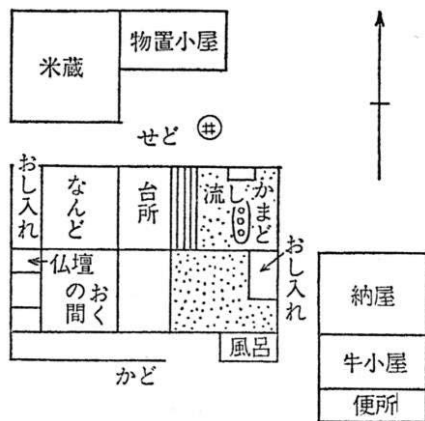


図 11 明治末期から昭和時代民家平面兼配置図  
(『日高町誌』より転掲)

一方、上層階級の平面構成の変遷を近世に四間取り例として取り上げた旧美山村の寒川家住宅から検討する。当家は中世から続く家系で、地頭職から地主、神職、林業家として変遷する中で家屋も変容している。主屋の建築年代は『寒川村誌』に、江戸時代後期の嘉永三(1850)年に第34代当主寒川大海が改築したと記述されている(寒川村誌編纂委員会 1969 p. 407)ことから、それ以前と推察される。近世の平面構成は、『和歌山県の民家』で部屋境食違い四間取りとされているが、大正7年と大正14年の家相図が所蔵されており、聞き取り調査も含めて大正末期からの変遷を検討する(図 12)。

大正時代には入口土間脇に別棟で風呂場が付帯し、土間は通り土間形式で中程に大きな地炉が設けられていた。その奥の炊事場は、すでに別棟で配置されていた。土間が二分された時期は明確ではないが、昭和30年頃にはすでに大黒柱列で中戸により二分されていた。

これまでに取りあげた一般民家の座敷は押入や仏壇が設けられ床の間が確認されないが、当家の主座敷は神棚と1間幅の床の間、廻り縁をもつ格式的な造りであった。大正14年以降にナンド境にあった床の間と仏間、押入れを取り込み、6畳から8畳に拡大した経緯がある。次の間との境には欄間が嵌められている。長押も廻されているがこれは後補で、差し鴨居の上に打ち付けられている。

一方、家族の居所であるダイドコは10畳と広く、また、付書院をもつ珍しい造りで、当家の格式性を感じさせる。

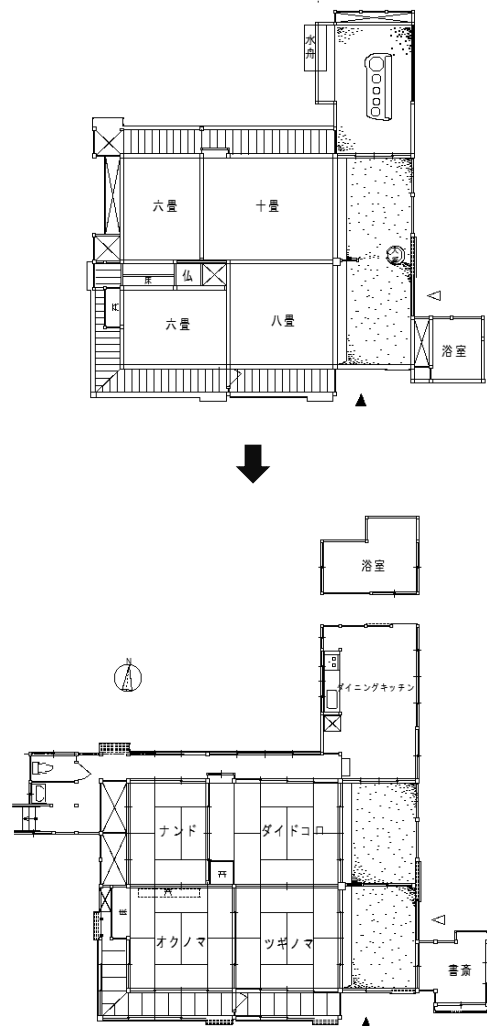


図 12 寒川家住宅大正14年家相図(部分)と平成24年現状平面図

基本とする平面構成は近世から大きな変容はないが、座敷の拡充、格式化の付与、ナンドの開放、炊事場の別棟化が図られていることがわかる。

つぎに、昭和初期頃の平面構成を調査事例から検討する。

日高川下流に位置する日高川町土生の湯川家住宅の主屋は昭和初期の建築である。建築時の平面構成は通り土間形式であるが、前土間に接続して納屋が下手に設けられ、納屋内に風呂・便所の衛生空間が配されていた。日高川町川中に居住していた中津村文化財保護協会元会長で、元中学校校長、加藤安蔵氏(大正 15 年生まれ)からの聞き取り調査では、昭和初期には、土間で藁叩き、縄ない、草履作り、俵編み、唐臼での米搗き等の作業がまだ行われていたようであるが、唐臼での米搗きは昭和 10 年代までで、その後足踏み脱穀機が登場し、土間での農作業が減少し、納屋に多くが移行する。湯川家の納屋の構成もこのような時代背景によると考えられる。炊事場はすでに奥土間の下手に別棟で張り出していた。

床上部分は、前列土間側から四畳と六畳の二室が並び、後列室は下手土間側が半間張り出した六畳で、奥は六畳の納戸である。さらに背面に奥納戸六畳が突き出している。

そのために、主屋は伝統的な通り土間で床上部分は土間境食違い四間取り形式であるが、後方に居室が1室、さらに下手に炊事場が張り出し、納屋が付帯する平面構成になっている。炊事場の拡充と居室の増加による平面構成の変容、付属屋への移行がうかがわれる(図 13)。

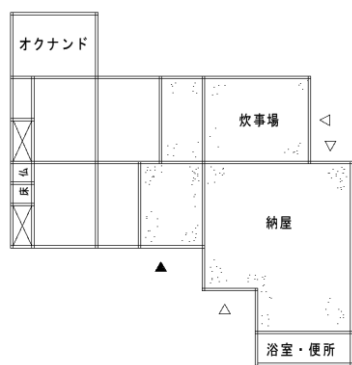


図 13 湯川家住宅復原模式図(聞き取り調査から作図)

### 3.2.2 昭和中期以降の変遷

高度経済成長により生活も大きく変化していった、昭和 30 年代以降の平面構成の変遷を調査家屋から捉える。

昭和元年に、日高川町船津に建築された中川家住宅の主

屋は、土間の前面に風呂場が突き出し、土間はまだ通り土間の伝統的形式であった。しかし、前土間内にはオシデと呼ばれていた収納戸棚が据えられ、奥土間の炊事場(カマヤ)下手には井戸舎が付帯していた。

床上部分の前面には縁側が配され、その床下には1坪程度の広さの芋穴が掘られている。土間にあった家も多かったが、当家では縁下である。床上部分は4室から成り、後列の土間境の部屋(ダイコロ)が半間張り出す、土間境食違い四間取りで伝統的な平面構成が踏襲されていた。

昭和 30 年代には、奥土間のカマヤにあった竈が撤去されるなど変化していく。平成3年に大規模な改造が行われ、土間の前面は応接間に、奥土間は床上のダイニングキッチンに変化し、浴室は物置となる(図 14)。

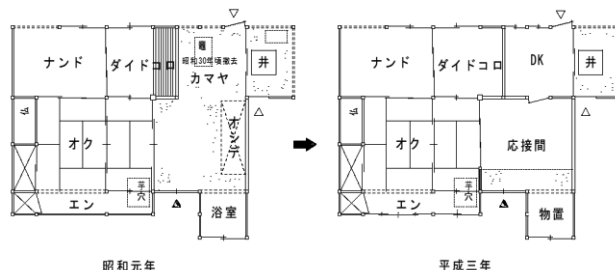


図 14 中川家住宅平面変遷図(観察・聞き取り調査による)

前述の加藤安蔵氏(大正 15 年生まれ)からの聞き取り調査でも昭和 30 年代には台所改善が始まり、炊事場が大きく変容したことが知れる。炊事場の燃料源が薪からガス、電気に変化し、竈が用いられなくなる。井戸水、谷水から水道水にかわり、電気冷蔵庫も普及していく。さらに、生活の近代化が平面構成にも現れ、奥土間の炊事場は昭和 40 年代頃から床上化し、起居様式も洋風化により椅子座のダイニングキッチンへと変容していくことが把握された。前土間も、納屋の普及や農作業の変化、兼業化や離農により、土間の必要性が低下し、床上化されていく。

寒川家住宅でも昭和 53 年に別棟で後方に張り出していた土間炊事場を床上化し、椅子座のダイニングキッチンに改造している。日高川町江川の上原義則氏から、自宅の土間を板間化したのは昭和 55 年であり、前土間は板間の洋間として、奥土間は椅子座のダイニングキッチンとしたことが聞き取れた。

これらの事例から、前土間は玄関ホールや応接間、奥土間は椅子座のダイニングキッチンに変容する傾向が捉えられる。

さらに、新たな平面構成が現れる。昭和 43 年に発行された『山野区誌』には、「二階建ての家ではこれらの間取りとは全く

違っている。土間を狭めそれだけ座敷の方へまわして小間をふやし、中廊下をつけて上便所を設けてある。全く住宅型である。」(山野区誌編纂委員会 1968 p. 477)と、すでに中廊下型も導入されていることが記されている。伝統的な民家の平面構成が解体し、姿を消していく様が把握される。

#### 4 要約

日高川流域の民家の近世後期の平面構成は、通り土間形式であった。土間は出入口、通路の機能を持ち、前土間は農作業場として、奥土間は炊事場として用いられていた。また、風呂場や小便所は土間前面の軒下に設ける特性がある。

床上部分は、原型と思われる二間取りから三間取りに、さらに部屋境食違い四間取りに発展し、整形四間取りに至ると考えられる。そのために、桁行き、梁行き方向に裏側土間境の居室が張り出す、近接した有田川・貴志川中流域から上流域の民家とは異なる様相を呈している。むしろ紀の川流域の民家の発展過程と類似していることが掌握される。

近代以降は近世の平面構成を継承しながらも、新たな要素が加味され変遷していく。大正時代には土間周辺に変容がみられ、小便所や風呂場が土間前面から納屋や別棟に移行するようになる。奥土間の炊事場は、別棟で土間下手に付帯して設けられるようになる。床上部分は四間取りが主体となり、座敷空間の格式化も一部で図られる。昭和初期には四間取りを基本としながらも居室の拡充により平面構成が変化、発展する傾向がみられる。前土間は農作業場としての機能を次第にもたなくなり、伝統的な平面構成が土間から解体する。昭和30年代以降は竈改善などの生活の近代化が進み、椅子座化や土間の床上化が行われ、昭和50年代には平面構成にも変容が現れ、農家住宅から専用住宅化していく。

本稿では、日高川流域の民家の特性と変容の大筋は捉えられたが、文献資料を補足するための調査家屋事例が少く、時代別考察は粗雑な検討になった。今後、調査事例を増やしながら詳細な時代考証に努めたい。また、平面構成以外に屋根材や付属屋等の特性と変遷も捉えていきたい。

#### 註

1) 研究業績でも平面構成関係を参考文献に示したので参

照されたい。

- 2) 日高川は、奈良県十津川村、和歌山県田辺市、和歌山県日高郡日高川町、日高郡日高町、日高郡美浜町、御坊市の2市3町1村にまたがり流下するが、流域沿いの民家としては、本稿では日高郡日高川町(旧美山村、旧中津村、旧川辺町)と御坊市、日高郡美浜町、日高郡日高町の民家を対象とする。
- 3) 2004年7月と2005年6月の調査は、和歌山信愛女子短期大学の生活文化ゼミで実施したものである。それらの研究成果は、池田他(2005)と大浦他(2006)に掲載している。
- 4) 当家は、昭和44年に和歌山県指定文化財となり、和歌山県立紀伊風土記の丘に移築されている。
- 5) 「十振り」とは、前・後列各10畳の規模の平面構成をいう。
- 6) 「六振り」とは、前列は6畳1室、後列2室(ダイドコロ、ナンド)が各3畳の三間取りの平面構成をいう。
- 7) 寒川家は、『寒川村誌』によると中世まで遡る歴史ある土豪の家系で、第6代寒川小三郎藤原朝玄が建久元(1204)年に源実朝から寒川荘の地頭職を任じられ、関東よりこの地に移り居住する。館は防御のために土居を築いたことから土居の家号がつけられ、部落の小字名にもなったとされている。また、同年には大宮権現を創建し、明治6年に村社に列し、寒川神社と号し、歴代寒川神社の宮司を務める家柄でもある。
- 8) 対象地域は明治21年に大暴風雨に、22年には大洪水に見舞われ、倒壊、流失した家屋が多数あった歴史がある。そのために、明治後期から大正時代には家屋が新築された事例が多く、変容もあったと推察される。

#### 参考文献

- 池田奈他(2005)「中津村の生活文化に関する調査研究 -住まいについて-」『和歌山信愛女子短期大学 学生論集』第33集 pp.13-14
- 大浦綾子他(2006)「日高川町中津地区の住まいに関する調査研究」『和歌山信愛女子短期大学 学生論集』第34集 pp.13-14
- 川辺町史編さん委員会(1997)『川辺町史』第二巻通史編下
- 御坊市史誌編さん委員会(1981)『御坊市史』第二巻通史編Ⅱ
- 寒川村誌編纂委員会(1969)『寒川村誌』



- 千森督子(1983)「紀ノ川流域の民家に関する一考察-中流域の場合-」『信愛紀要』第23号 pp. 33-39
- 千森督子(1987)「紀ノ川流域の民家に関する研究(第二報) 中流域から下流域にかけて」『信愛紀要』第27号 pp. 18-24
- 千森督子(1996)「貴志川流域の民家の間取り形式に関する研究」『信愛紀要』第36号 pp. 19-25
- 千森督子(1997)「有田川流域の民家の間取り形式に関する一考察」『信愛紀要』第37号 pp. 1-6
- 千森督子・谷直樹(2002)「農家住宅の平面構成の近代化過程に関する考察 -前座敷系統に属する紀ノ川流域の場合-」『生活科学誌』第1巻 pp. 101-112
- 千森督子・谷直樹(2003)「紀伊山地の農家住宅におけるアガリトの生活史的研究(第1報) アガリトの成立とその要因」『日本家政学会誌』第54巻第1号 pp. 39-46
- 千森督子・谷直樹(2004)「紀伊山地の農家住宅におけるアガリトの生活史的研究(第2報) アガリトの普及および解体過程」『日本家政学会誌』第55巻第2号 pp. 181-186
- 千森督子(2005)「紀州民家の地方性と近代化に伴う変容に関する生活史的研究」大阪市立大学大学院後期博士課程生活科学専攻博士論文 pp. 1-251
- 千森督子(2008)「紀南の竈床上型民家におけるカッテの特性と近代化に関する研究」『平成20年度日本建築学会近畿支部研究報告書』 pp. 361-364
- 千森督子・山本新平・増田亜紀・川端義治(2009)「紀南の民家の地方性と近代化過程に関する生活史的研究 -熊野型民家の平面構成の特性と変遷-」『住宅総合研究財団研究論文集』No.35 2008年度 pp. 179-190
- 千森督子(2011a)「北山川、熊野川流域の民家における平面構成の成立と変容」『信愛紀要』第51号 pp. 1-6
- 千森督子(2011b)「熊野川上流域の民家における平面構成の特性と変容-田辺市本宮町-」『民俗建築』第139号 pp. 31-36
- 千森督子・谷直樹(2011)「熊野川、北山川流域の民家における平面構成の特性と変容に関する研究-田辺市本宮町、新宮市熊野川町、東牟婁郡北山村」『平成22年度日本建築学会近畿支部研究報告書計画系50号』 pp. 361-364
- 千森督子(2013)「和歌山県東牟婁郡北山村の民家にみる屋敷構えの特性について」『民俗建築』第144号 pp. 16-22
- 千森督子(2014)「紀中の土豪寒川家の屋敷構えと家屋形態に関する考察」『信愛紀要』第54号 pp. 67-73
- 千森督子(2015)「和歌山県の民家にみる地方性に関する研究-紀南を中心として-」『信愛紀要』第55号 pp. 73-80
- 千森督子・堤涼子(2015)「熊野川流域の民家にみるアガリヤ(避難小屋)について」『民俗建築』第148号 pp. 23-29
- 千森督子(2016)「災害に備える紀伊半島の住まいの地域特性に関する研究-北山川下流域のアガリヤ(災害時避難小屋)検討-」『信愛紀要』第56号 pp. 65-71
- 中津村史編纂委員会(1996)『中津村史』通史編
- 日高郡役所編(1923)『日高郡誌』下巻
- 日高町誌編集委員会(1977)『日高町誌』下巻
- 美浜町史編集委員会(1984)『美浜町史』資料編
- 美山村史編纂委員会(1995)『美山村史』通史編上巻
- 美山村史編纂委員会(1997)『美山村史』通史編下巻
- 矢田村誌編纂委員会(1960)『矢田村誌』
- 山野区誌編纂委員会(1968)『山野区誌』
- 和歌山県教育委員会(1969)『和歌山県の民家』